

## メッセージアウトライン マタイの福音書4：12～17 「死の陰の地に光が昇る」

[12-13]「イエスはヨハネが捕らえられたと聞いて、ガリラヤに退かれた。そしてナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある、湖のほとりの町カペナウムに来て住まわれた」

このマタイの福音書ではイエスがガリラヤで宣教を開始されたということが記されているが、実はそれ以前に南のユダヤ地方で伝道活動を開始されていたことがヨハネの福音書の1~4章にかけて書かれている。ではなぜマタイはガリラヤでの伝道から書き始めているのであろうか。それにはやはり理由がある。マタイの福音書の目的はイエスが旧約聖書の預言した約束の救い主ということを強調している。それが旧約聖書を信じているユダヤ人にとっては一番良い、またわかりやすい説明の方法である。それゆえイエスがガリラヤから宣教を開始されたのは旧約聖書の預言の成就であるとマタイは読者に言いたいのである。

ではなぜイエスはそれまで滞在していたユダヤ地方からガリラヤ地方に来られて、伝道を始められたかということについてはそれ相当の理由がある。

まず第一に、イエスのガリラヤ伝道の契機としてバプテスマのヨハネが捕らえられたという事件があった。当時イスラエルの国はヘロデ大王が死んで、その息子たちに分割されており、ガリラヤ地方はヘロデ・アンティパスという息子が治めていた。彼は初めはアラビアの王の娘を娶ったが、その後、自分の兄弟ピリポの妻ヘロディアを知り、彼女を愛し、ついに彼女を自分の妻として迎え入れ、アラビアの王の娘を追い返してしまった。しかもよく調べてみるとこのヘロディアはヘロデ・アンティパスの姪なのであった。それで旧約聖書の律法によれば彼らは姦通の罪を犯したことになる。→レビ18:16、20:21 そしてこの点をバプテスマのヨハネは厳しく追及したのであった。ヘロデはこの事件をきっかけにして、ヨハネによる民衆の暴動が起こることを恐れて、ヨハネを捕えるに至ったのであった。

バプテスマのヨハネがヨルダン川で人々にバプテスマを授けていたのは死海に近いユダヤ地方であった。イエスがヨハネからバプテスマを受けられたのも、御霊に導かれて荒野で悪魔の誘惑を受けられたのもこのユダヤ地方であった。そのため、イエスはそのまま、このユダヤ地方で伝道を開始することができたはずであるが、ヨハネ逮捕のニュースのために北部のガリラヤ地方で活動を開始することに

なつたとマタイは言う。しかしルカ4:14節を見ると、同じ記事が「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた」とある。それでこのマタイの箇所では、ヨハネが捕らえられたから、次は自分の番だと考えて、イエスがガリラヤへ退かれたと考えるべきではない。むしろ、これから開始しなければならない活動のために、御霊の力にあふれてガリラヤに帰って行かれたと理解すべきであろう。そして先駆者ともいべきバプテスマのヨハネの働きが終わったとき、イエスの福音伝道のための公生涯が始まるのである。それでイエスはガリラヤへ逃げたのではなく、ヨハネを捕えたヘロデ・アンティパスの治めるガリラヤへ乗り込んで行かれたと言った方がよいであろう。

このガリラヤ地方はパレスチナでは一番農産物が豊かな地である。そのため多くの人々がこの、地方に集まり、農業と牧畜に従事していた。そのためガリラヤ地方は面積に比較して人口が非常に多かったと言われている。それでイエスはヘロデを恐れることなく、この多くの民の救いのために宣教を開始されたのであった。イエスはまずガリラヤの自分の育った町であるナザレに行き、そしてその後、そこを去って湖のほとりの町カペナウムに来て住まわれた。このとき以来、イエスは自分の家を離れ、二度とそこに住まわれることはなかった。それはちょうど後ろの扉を閉めて前の扉を開けるようなものであった。しかし、イエスは決してご自分の家族を見捨てられたのではない。イエスはさらに多くのイスラエルのたましいのために新しい決断をされたのである。後になると分かるがイエスの家族も信仰を持つことになる。弟のヤコブはエルサレム教会の中心人物となり、新約聖書の「ヤコブの手紙」を書き、ユダは「ユダの手紙」の著者となる。

イエスが住まれたカペナウムの町はイスラエルを構成する十二部族のうちゼブルンとナフタリ部族の領土に位置する湖のほとりにある町であった。この「湖」とはガリラヤ湖のことである。このカペナウムこそイエスがガリラヤ伝道の拠点とされた町であった。

[14-16]「これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。『ゼブルンの地とナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦人のガリラヤ、闇の中に住んでいた民は、大きな光を見る。死の影の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。』」

イエスがこの町に住まわれた第二の理由は、旧約のイザヤ書の預言が成就するためであった。15~16節のことばはイザヤ書9:1~2節の引用である。七百年以上も

前にイザヤが預言したことがここで成就したとマタイは言う。カペナウムが代表するこれらの地方はまさに異邦人世界であった。BC721年に北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされ、民はアッシリアへ捕囚となり、その代わり、アッシリアの王は自分の支配する他の国々から外国人をイスラエルの地に移住させ、その結果、ガリラヤ地方にはユダヤ人と異邦人の混血の民が住むようになり、彼らは純粋のユダヤ人から見れば、まさに闇の中に住んでいる民、死の陰の地に住んでいる者たちであった。なぜなら伝統的なユダヤ人の見解によれば、純粋のユダヤ人しか救われないからであった。しかしイエスはあえてそのような地に光をもたらすために来られたのである。「海沿いの道」とは「湖に沿った地方」と訳せる。ガリラヤ湖の北側を西に向かう地域を指すと思われる。「ヨルダンの川向こう」とはガリラヤ湖の東側地域のこと。

また「ガリラヤ」は輪、周辺、地域を意味することばであり、それで「異邦人のガリラヤ」とは異邦人の地域を意味し、ゼブルン、ナフタリ、アシエル、イッサカルの各部族に与えられた地方もそれに含まれる。

カペナウムはこれらガリラヤ湖周辺地方の中心地であり、そこに人は集まり、商業は栄え、イエスの宣教開始に最適の町であった。

「闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る」…この光とは神を知るための光、真理の光、イエス・キリストご自身のことである。→ヨハネ8:12

[17]「この時からイエスは宣教を開始し、『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言われた」

実はこのことばはバプテスマのヨハネが語ったことばと全く同じである。→マタイ3:2 しかし、表現は同じでもヨハネは自分の後に来られる方イエスの道備えのためにそのように言ったのであるが、イエスはご自身の到来のゆえに「天の御国が近づいたから」と言われたのである。この悔い改めの説教に含まれているものは、心を変えなさい、生まれ変わらなさい、思想も生活態度も一切変えなさいという厳しい内容のものである。イエスは暗闇の中に住んでいるガリラヤの人々にも、あなたがたは悔い改める必要があると権威をもって遠慮なく語られたのである。

彼らが闇の中にいるのは金銭や衣食住が貧しいからというような理由ではなく、まことの神を知らず、求めず、従わず、自己中心に生きてきたからであり、自らの心から出てくる罪深い生き方のゆえであった。→マルコ7:20-23 神は心の中まで

聖さを求められる。→マタイ5:8

誰であっても自らの罪の悔い改めなしには暗闇の中から光へ移ることはできない。それゆえ、この悔い改めをせず、神のことばを聞くこともせず、神の支配される天の御国へ入ることはできないのである。神の前に今までの生き方を悔い改め、方向転換するときこそ、まことの光はその人たちの上に昇るのである。

暗闇の中にいるのは何もガリラヤの人々だけでなく、全世界の人々も対象である。そのような暗闇の中にいる民のために、神の御子イエス・キリストは救い主として来てくださったのである。どんな人でも、もう自分には光は差し込まない、もう自分なんかは救われる望みはないと絶望すべきではない。だれでも神のみことばを聞き、真理の光に照らされ、それまでの罪を告白し、自己中心と無知と、不信仰と思い上がりを捨てて悔い改めてイエスのもとに来るならば、救われ、新しくされ、喜びと感謝を持って生きることができるのである。→Ⅱコリント5:17